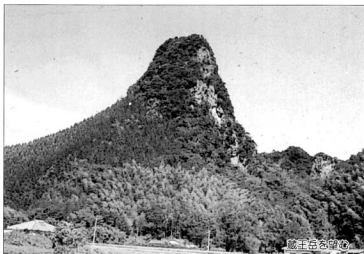


龍 門

第 33 号



平成15 (2003) 年

鹿児島県立加治木高等学校同窓会

同 窓 会 本 部 役 員

支 部 名	役 職 ・ 氏 名	住 所	電 話 番 号
会 長	池 田 正 夫 (中43回)	〒890-0082 鹿児島市紫原1-56-11	☎099-255-4474
副 会 長	安 藤 旭 (高2回)	〒892-0838 鹿児島市新屋敷町16-1318	☎099-225-3456
副 会 長	西 迫 雅 子 (高5回)	〒899-5222 姶良郡加治木町錦江町175	☎0995-63-3197
副 会 長	二 見 剛 史 (高10回)	〒899-6405 姶良郡溝辺町崎森2731-5	☎0995-58-3878
事 務 局 長	柏 木 恬 (高9回)	〒899-5433 姶良郡姶良町西宮島町4-8	☎0995-67-3383
監 事	川 野 泰 明 (中45回)	〒899-4316 国分市上小川304	☎0995-47-0068
監 事	猿 渡 三 継 (高11回)	〒899-5652 姶良郡姶良町平松6219	☎0995-67-3603

同 窓 会 支 部 連 絡 先

支 部 名	役 職 ・ 氏 名	住 所	電 話 番 号
北海道龍門会	会 長 石神久男 (中44回・㊦) 事務局 高原 昭二 (高22回)	〒066-0072 千歳市自由ヶ丘2丁目18-2 〒001-0856 札幌市北区屯田6条7-3-5-504	☎0123-23-3564 ☎011-774-7898
東北龍門会	会 長 信岡 道雄 (中45回)	〒985-0055 塩釜市赤坂1-1-1101	☎022-366-1945
関東龍門会	会 長 朝倉 正昭 (高11回) 事務局 渡田 泰壽 (高11回)	〒156-0055 世田谷区船橋6-11-7 〒350-1151 川越市今福1111-51	☎03-3329-4546 ☎0492-46-3430
近畿龍門会	会 長 宗像 惠 (高11回) 事務局 佐々木哲郎 (高21回)	〒578-0961 東大阪市南鶴池町2-15-20 〒586-0035 河内長野市小塩町636-4	☎06-6746-7549 ☎0721-63-1102
東海龍門会	会 長 西山 一郎 (高3回) 事務局 徳丸 千利 (高10回)	〒487-0035 春日井市藤山台5-10-15 〒453-0862 名古屋市市中村区岩塚町5-17	☎0568-91-8801 ☎052-414-0992
福岡龍門会	会 長 浜川 皓 (高12回) 事務局 萩之内八州 (高12回)	〒819-0052 福岡市西区生の松原3-8-511 〒811-3106 古賀市日吉1-14-24	☎092-882-4794 ☎093-943-3753
熊本龍門会	会 長 新納 義明 (高8回) 事務局 岡田兼二郎 (高40回)	〒861-5252 熊本市土河原町336-17 〒860-0812 熊本市南熊本5-10-28-1601	☎096-227-1348 ☎096-372-5347
宮崎龍門会	会 長 池之上武男 (高8回) 事務局 長谷川弘之 (高12回)	〒880-0032 宮崎市霧島町2-208 〒880-2113 宮崎市小松台北町31-9	☎0985-23-4651 ☎0985-47-2455
鹿児島龍門会	会 長 時任 純孝 (中41回) 事務局 堂脇 悟 (高22回)	〒890-0082 鹿児島市紫原1-2-2 〒890-0083 鹿児島市西紫原町13-2	☎099-254-4533 ☎099-265-2544
姶良支部	支部長 宅間 効 (高3回)	〒899-5543 姶良郡姶良町下名1142	☎0995-65-5304
加治木龍門会	会 長 宮路 義和 (高6回)	〒899-5241 姶良郡加治木町木田2039-1	☎0995-63-4213
隼人龍門会	会 長 岩城 義雄 (中37回) 事務局 松崎 孝成 (高27回)	〒899-5112 姶良郡隼人町松永1224 〒899-5192 隼人町内山田7 隼人町役場内	☎0995-42-0852 ☎0995-42-1111
吉松支部	支部長 福元 和人 (中47回)	〒899-6103 姶良郡吉松町川添1483	☎0995-75-2866
国分支部	支部長 船盛 一美 (中47回)	〒899-4342 国分市野口町14-38	☎0995-47-0046
溝辺支部	支部長 松山淳一郎 (高2回)	〒899-6401 姶良郡溝辺町有川625-135	☎0995-59-2363
三師龍門会	会 長 有馬 榮徳 (高3回) 事務局 立石 基高 (高23回)	〒890-0082 鹿児島市紫原6-33-19 〒899-5211 姶良郡加治木町新富町105	☎099-254-3298 ☎0995-62-2007
鉄道龍門会	会 長 田村 勝則 (高2回) 事務局 松永 善明 (高21回)	〒899-5105 姶良郡隼人町小田2474-8 〒890-0045 国分市清水3-11-6	☎0995-47-7707
県警龍門会	会 長 取達 俊一 (高16回) 事務局 川畑 正和 (高16回)	〒890-0064 鹿児島市鴨池新町2-1-601 〒890-0064 鹿児島市鴨池新町10-1 県警本部	☎099-256-2273 ☎099-206-0110

特別寄稿

「みなみの手帖」始末記

羽島 さち

(高女十一回卒)

私の誕生日は四月一日である。おかげさまで本人の私が忘れていても、誰かが覚えていて教えてくれている。そして四月一日で私は満八十六歳になる。気が遠くなるほどの水さであるが、過ぎ去るものと八十六年一歩である。昭和四十六年十一月、就職代りに始めた「みなみの手帖」も、たくさんの方々に支えられて、三十一年もやらせていただいた。見よう見真似での雑誌づくり。それでも当時、同人誌・タウン誌はあっても、歴史、民族、考古を含めた文化誌は、それまでの関心になかった。みなさんの関心をひき、原稿集めには苦労したかった。

だが、数年にして季刊発行は、経営上困難になり、年三回発行を余儀なくされた。

今、三十一年の特集を返って見ると、いろいろな特集をしている。まず新大隈園発刊の特集、西郷隆盛特集、西南戦争特集、大久保甲東特集、五大石園問題など。そして創刊三年目に企画した「端附特集号」。これは本誌では初めて

の特集で評判になりNHKの取材を受けた。大口市へ泊まりこみでの撮影。そして全国放送された。

また、毎号、読者を縛りつけた連載動物。例えば夏目 漢氏の「朱那夢萬葉記」(十六回)、片岡吾庵漢氏の「石亀日記」(十四回)、五代夏夫氏の「保寧問答語」(十七回)など、もの凄いの反響であった。

また、島尾敏雄、五代夏夫両氏選による「みなみの手帖文学賞」を実施した。優秀賞はなし。佳作一席、三原実敏氏。二席、阿久根星斗氏であったが、今は共に故人。また小説特集号、掌聲小説(四頁)特集もした。なかでも掌聲小説はユニーク。大好評であった。

こうして、創刊を意図した当初からの目標、「小説を掲載する」「保存しておきたいものを掲載する」を守り通してきた。おかげで「南日本文学賞」受賞者も五人。会員も徐々に増え、定着していった。

執筆陣も多彩。原稿は不自由しなかった。「ほんとうに書きたいものは「手帖」に載せて欲しい」という有難い発言もいただいた。それにしても経営は、さすがの私も音をあげた。金のない辛さを初めて味わった。借り入れというものも初めてした。勿論、小細ではあったが、何年かつづいた。おかげで国民年金の継続もできず仕舞だった。

何しろ、集金が苦手。広告とりにも自ら出かけたこともなかった。広告代も三十一年間、遂に値上げもせずだった。発行を考えた時から、「食えればいい」などと思っていたのだから。印刷代は二倍以上になった。それでも好き仕事。だからやって来れたと思ふ。

一昨年六月、創刊三十周年記念祝賀会を開いた。二十周年記念祝賀会からの十年の早かったこと。我ながら「三十周年」に驚いてしまった。年三回の刊行と、いくつもの団体の役員として、「広報担当」などを引き受けて、日々追いまくられる生活をしていて、月日の流れは早い。

それにしても三十一年は水く重かった。一年前から始めた創刊三十周年記念行事の準備は、八十代も半ばの老体にはこたえた。

おまけに今回は、水年、無償で「みなみの手帖」の表紙絵を描いて下さった先生方への、せめてもお礼のつもりで、幸い私の手許に表紙絵がたぐり残っていたので「みなみの手帖表紙絵原画展」

を、祝賀会の前後一週間、鹿児島市立美術館で開催した。こんな展覧会は珍しかったので、会員外の見客も含めて、たくさんの方に来ていただいた。

このあとと昨年一年は、しめくりとしての終刊号の企画もたて

二六会古稀記念旅行と

想い出すひとつ

東海龍門会会長 西山 一郎

(高三回卒)

古稀記念旅行

平成十四年秋、私達は古稀を祝うべく一泊二日のささやかなものではありましたが、有志四六名(男三十、女十六名)が集まり、高山、新穂高温温泉地区に同期生として心暖まる旅をして来ました。十月十日(木)関東組は新宿より貸切バスで、関西組はJR高山線で午後二・三時には高山入り、高山祭を見学、宿泊は高山グリーホテル、翌日は八時出発、東京組の観光バスに同乗、平湯温泉、新穂高温温泉へ、新穂高温温泉(千七百七十七米)でロープウェイにより鍋平高原(三千三百五十五米)へ、ここで乗替で、しらかば平より終点の西穂山口(二千五百六十六米)へ登る。乗替で若千の待ち時間はあるものの、正味二十分弱

の乗車で一気に千米を浮上する。下界との温度差は六度、急速な気圧の低下、気風の降下があり体調が万全でなかった伊藤(康)君が少々バテ気味。しかし、屋上の展望テラスへ上ると正面には北アルプスの雄々(三千八百八十米)、北穂高温(三千六百六十六米)、奥穂高温(三千九百八十米)、西穂高温(三千九百八十八米)の北アルプスの連峰、左手後方には奥穂の笠ヶ岳(三千八百九十八米)の嶺々と三百六十度の展望、目の前にそびえる北アルプスの大パノラマの絶景に一同驚き感嘆の声をあげる。この雄姿を同参加の紙友達に古稀祝いのプレゼントとしく「東京でんがらもん会」(二六会関東在住者)の幹事酒匂、川口、伊藤、堀中、近藤の椿元と諸君と

で無事終了。思い残すこともなく幕を下ろすことができました。今、二月、そして私は、以前からの計画通り、枯枝の古い隠居家の修理も近くなり、やがてそのついでに住居へ移り住むことになっている。

行程を組みました。当日は天は我々に快晴の日和を惜しげもなく与えてくれた。金剛以来、半年間余り此の日が天候に恵まれる私だけを願ひ続けていたので、私達の中ですべて「天有難う」と繰り返して鳴っていた。その前の六月、志木市(埼玉)からわざわざ訪れた水長君は天気が悪く、濃霧にまかれ境界は全くゼロ、空しく下山したとのこと。此度の快晴の下での絶景に改めて感動をかくしていった。下界では紅葉が時期尚早であったが、期待していた奥飛騨路での紅葉狩は出来なかったが、ロープウェイでは千米差の景観が、次々と濃淡変る紅葉の色彩を添いむことが出来た。これまでは私は長野県側上高地(千五百米)より歩一歩山登り、さらに稜線を一時間二十分かけて西穂高(二千七百一十米)着となる行程を学生時代から延べ四回登っているが、さすがに七十代に入ると体力の衰えは否めず、このルートでの五日目の登坂はあきらめていた。しかし、岐阜県側から西穂高までロープウェイを利用するも充分楽しめるものとなったのは有難い。

また、長野県側と岐阜県側を結ぶ安房峠の難所がトンネルの開通で至便となったため、一泊二日で奥飛騨路・ロープウェイと上高地の心を洗ひ清められるような別天地での散策も、東京、大阪からでも容易となった。

九州では見られないアルプスの嶺々、上高地の白樺、落葉松の林、御嶽山(三千六十七米)のすそ野に展開する開田高原等は是非一度なら訪れたい所です。

帰途は新穂高温道(穂高荘山のホチル)で郷土博覧会館の昼食を済まし、残り時間を気にしながら「山映館の湯」の露天風呂に浴び、再度湯けむりを通して槍ヶ岳を遠望、午後二時急行バスで松本駅へ。松本駅までの二時間は中・高時代に果せなかった修学旅行を思わせるような同級生だけの水入らずの楽しい時間となった。

理科の先生酒匂君がタクトをふり「青い山脈」「高校三年生」等の大合唱となり、個人でもノド自慢が夫々の持ち歌を披露、給良町から参会した横さんは苦瓜の砂糖漬を全員に試食して貰いながら作り方の解説。下界に戻り元氣回復した1君の愉快な発声もあり、車内は大いに盛り上がり、あっと云う間の二時間で松本駅着。関西組はサヨナラして下車、JR中央線へ。

参加者四十六名は遠く九州より谷口会長を含む六名(男女各三名)関西より八名(男女各四名)東海より男二名、関東三十名(男二十一名、女九名)であった。

二六会総会は鹿児島市内、霧島元前四十四年ローマの名将カエサル(シザー・五十五歳)は王制への移行を阻止しようとする元老院の反対派四十人により、ポンペイウスと同盟で暗殺された。倒れる時カエサルは誰れも信頼していた部下の一人、ブルタスを刺客の中に発見フルタスよ、お前もか一名文句を喋らされた。「弟よ、お前もか」と怒られたと聞き、数字の権威東郷先生も、なかなかどうして歴史の故事を踏まえた愛の鞭をふるわれたものだと思ふが、怒られた弟の方は勿論すんなりとは取まらなかった。

単人の飯代金から新築なった本学校へ帰って来た時、陸軍士官学校在学中だった白濱傳先生は敗軍の将の玉子として帰郷され、母校の我々の教壇に立たれた。色白、ヤサ男。初対面で直感した事は、「こんな好青年の帝國陸軍士官は、とても、あの『鬼畜米英』には敗北を喫したに違いない。いや、しかし次に思い直したのは「いや、この攻的な死には違ひやらなかったに違いない」。

平成九年、二六会総会を霧島観光ホテルで持った時、東郷先生と白濱先生の恩師お二人をお迎え出来た。平成十三年の高卒五十年記念総会には白濱先生一人が出席された。

回想すれば、我々中・高在学時代同期生の殆どが、ご苦労をおかけした歴代何人かの数字の恩師の方々、五十年たった今もお世話をかけています。正に、仰げば尊しですが師の恩です。まことに私事ですが、不得手だった数字も、東京お茶の水近郊の駿台名門校に入っ、初めて、その面白さに開眼した。熱心に教えて下さった母校の数字の先生方には、在校時代に反旗をひるがえした生憎気さなもの自分の自分をきんげし、遅すぎた数字への開眼を後悔していました。

昨年またまた、白濱先生宅に参上する機会があった。暫しの談話中、先生の机上に読みさしの「ローマ人の物語」(塩野七生)の文庫本を見出した。「先生も、この本などをお読みになっておられればボケる暇などありませんね」と不謙に申しあげた。「うん、僕達の先生仲間を見てみると、理系の先生よりも、文系の先生のほうがボケが早いようだ」とのこと。我々も古稀を迎え、此の先ボケ老人にならないが、臨臨の理系化を企図するため、もう、手遅れだ。精々、先生にあやかり、今後とも大層で十五巻を予定している「ローマ人の物語」シリーズ(既刊十一巻)を楽しみ続けたい。

また、聖路加国際医療理事長の日野原先生の随筆に「老いの生き方」も読んでいきたいと思う。

